

教材研究

“馬込のフェアブル” 昆虫記 —2022 年、馬込八幡神社境内で撮影した昆虫・クモ類—

伊藤 洋文
Hirobumi ITO

1、はじめに

2022（令和 4）年 4 月、多忙な 1 学期がスタートした。社会的には 2020 年に始まったコロナ禍が続いており、仕事上の多大なるストレスに加えて、人一倍旅好きの私にとっては、どこにも出かけられない状況もストレスとなって蓄積される毎日が繰り返された。

遠出ができない状況で、ストレス解消のために 2022 年の春から本格的に始めた日課が、近場での自然観察、すなわち神社の境内での生き物の観察と写真撮影である。私が欄^ら宜^ぎとして奉職している大田区の馬込八幡神社では、これまでもいろいろな生き物を観察、撮影してきた。小さなものでは昆虫、大きなものでは鳥類やハクビシンまで撮影している。2012 年刊行の『外苑春秋』第 2 号には境内のアゲハ、2013 年刊行の第 3 号にはヒキガエル、2015 年の第 5 号にはヤモリの特集を掲載した。いずれも当時小学生だった娘と一緒に観察をした境内の住民たちである。また、2021 年の第 11 号では、境内で撮影したさまざまな生き物の写真を、地元の幼稚園で展示してきた経緯を紹介した。そしてこの 2022 年度は、今まで目立つ種にしか目を向けてこなかった境内の小さな虫たちに注目して、さらに深く探究することにした。

ところで、昆虫の世界の面白さ、目新しさに改めて気付かされる出来事が、2021（令和 3）年 10 月にあった。私が地元で関与している幼稚園の運動会でのことである。馬込八幡神社のすぐ隣にある馬込小学校の校庭を借りてその幼稚園の運動会を開催した際、校庭の脇に植えられたソテツの周囲を飛び回るシジミチョウが目に入った。よく見かけるヤマトシジミかと最初は思ったが、ソテツの周囲ばかり飛び回っているのが気になった。デジカメで撮影して拡大してみると、ヤマトシジミにはない斑紋と尾状突起があることが分かり、クロマダラソテツシジミと確認できた。クロマダラソテツシジミは、名前の通りソテツを餌とする、東南アジアから南アジアに分布する南方系のチョウで、温暖化の影響で北上してきたと考えられている。馬込地域で初めて確認したことから、知る人ぞ知るマニアックな月刊誌『月刊むし』（むし社）に投稿したところ、2022 年の 6 月号に掲載していただいた。

考えてみると、私と虫との付き合いは長い。幼稚園の頃から虫の絵ばかり描いていた。小学生となり、ボロボロになるまで眺めていた本は昆虫図鑑だった。中高一貫の中学時代はサッカー部でレギュラーまで務めていたが、兼部していた生物部の方が面白くなったため、高校1年の冬にサッカー部は退部してしまった。クラブ活動は生物部に絞り、昆虫班の班長を務めた。大学2年の夏にヨーロッパを2か月間、バックパッカーの旅をした際には、南フランス、プロヴァンスのセリニャン村に立ち寄り、博物館として公開されていたファーブル晩年の家を訪れた。ジャン・アンリ・ファーブルは虫好き少年にとっては心の師であり、『ファーブル昆虫記』は愛読書の一つだった。そしてかつての虫好き少年は、還暦を迎えたこの歳になっても、まだまだ知らない昆虫の世界があるという感激を日々味わい続けている。

ここでは、2022年4月末から12月初旬まで馬込八幡神社の境内を散策し、観察、撮影した虫たちの中から特筆すべき種を紹介したい。

2、撮影場所および観察・撮影方法

(1) 撮影場所

撮影場所は、大田区南馬込5丁目に鎮座する馬込の総鎮守、馬込八幡神社の境内である。坂が多い馬込の中では、すぐ隣の長遠寺や馬込小学校とともに、標高約26mと比較的高い場所に位置している。第2京浜国道（国道1号線）、環状7号線、東海道新幹線の線路からも近い、住宅地の中の小さな神社である。イチヨウ、ケヤキ、クスノキ、エノキ、アカマツ等若干の大木はあるものの、決して自然が豊かな環境ではない。しかも境内の地面は、車で入りやすいようにと先代の宮司によってほとんど全てアスファルトで覆われてしまっており、土壌が露出している部分は少ない。ちなみに、よく広さを表す際に、「東京ドーム〇個分」という表現をするが、境内の面積の1877.69m²（568坪）で換算してみると、東京ドーム（46,755m²（14,168坪））のわずか0.04個分（4%）、すなわち25分の1であった。そんな狭い神社の境内で、何種類の虫と出会えるのだろうか。

(2) 観察・撮影方法

2022年4月27日（水）から、大雨の日や外出した日を除き、1日1～数回、境内を15～20分程度で巡回し、目にした虫（昆虫には含まれないクモ類等も含む）を片っ端から撮影した。平日の散策は夜間だけであったが、研究日である土曜日や日曜・祝日等は、家での仕事の合間に日中も巡回した。この散策は、夜の寒さが辛くなり、虫の姿がほとんど見られなくなった12月10日（土）まで実施した。なお、使用したカメラは特別高性能の一眼レフなどではなく、使い慣れた小型のデジカメである（Canon、SX720 HS）。

ところで、昆虫を採集する場合には、以下の方法が一般的である。

- ・「見つけ採り法」（肉眼で見つけて捕まえる方法）
- ・「スウィーピング法」（木や草などを捕虫網ですくい取る方法）
- ・「ビーティング法」（木の枝や草などをたたき、その下のネットに虫を落として採集する方法）
- ・「崖・朽ち木崩し法」（崖の土中や朽ち木内部の虫を採集する方法）
- ・「ライトトラップ法」（灯火に集まる虫を採集する方法）
- ・「バイトトラップ法」（餌または餌と同じ匂いがするものをトラップに入れ、おびき寄せて採集する方法）

これらのうち、「見つけ採り法」および「ライトトラップ法」を踏まえての観察、撮影を行った。境内では捕虫網等は一切用いず、また、虫たちの食草、食樹を損なわないよう、肉眼で見つけた虫だけを観察、撮影した。基本的には屋外での撮影が中心であるが、1cmもないような微小な虫は、ペトリ皿に方眼紙を敷いた手製の観察ケースに入れて、書斎にて撮影やルーペを用いた観察を行った。その他に使用した道具は、夜間の観察、撮影時に使用した懐中電灯くらいである。

3、予想以上に豊かな多様性

2022年4月下旬から12月上旬に出会った虫たちのうち、ここでは外来種以外で特筆すべき種を紹介したい。なお、外来種については次の4章で取り上げたい。

(1) カメムシ目（半翅目）

なぜ今まで気が付かなかったのか自分でも不思議だが、コウチュウ目やチョウ目とほぼ同じくらい多くの種を確認できたグループがカメムシ目だった。また、このカメムシ目には体長が1cmもない微小な種が多く存在することも初めて知った。このカメムシ目には狭義のカメムシ類だけでなく、セミ類やハゴロモ類、ウンカ、アブラムシ類など多彩な分類群が含まれており、微小な種の中には同定が困難な種が多かった点が印象的であった。ウンカやアブラムシ類の多くは迷宮入りしている。

①クワキジラミ

虫たちの撮影を始めて間もない5月上旬のこと、クワの木の葉の裏に繊維状の白い物体が密集しているのに気が付いた。一見カビのようだが、クワキジラミという昆虫の幼虫である。この幼虫は、ロウでできた白い物質をつくることで身を守っているらしい。葉の裏に密集しているものの、メスのクワの木は例年と変わらず実を付けており、クワの木にそれほどダメージを与えているとは思われなかった。

3mmほどの成虫も、後日同じクワの木で撮影した。広義ではセミの仲間だけに、成虫はセミをうんと小さくしたような形態をしている。「シラミ」と名前に付くのが気の毒だが、アマジラミ等ヒトに寄生するカジリムシ目（咀顎目）とは分類学上全く異なる昆虫である。



写真1 クワキジラミの幼虫



写真2 クワキジラミの成虫

②ハギメンガタカスミカメ

これも5月のことである。クチナシの葉の上に、1cmもない大きさの、これまでに見たこともない形態のカメムシを見つけた。触角の代わりに脚が生えたような形態である。

「生物」の授業では、ショウジョウバエの触角の部分に脚ができたアンテナペディア突然変

異という現象が出てくるため、てっきりそれと同じような突然変異ではと思ったのだが、調べてみると突然変異ではなく、元々このような形態のようだ。近縁種にメンガタカスミカメというカメムシがおり、背中に目玉模様があることから「メンガタ」というそうである。しかし、このハギメンガタカスミカメには目玉模様がないので、名前に「メンガタ」が付くのは妙な気がする。ちなみに幼虫の食樹がハギであるため、ハギメンガタカスミカメというらしい。



写真3 ハギメンガタカスミカメ

③ヒゲナガカメムシ・ヨツボシヒョウタンナガカメムシ

境内を散策して小さい虫を探そうになってから、植物の見方も変わってきたことを実感する。例えばエノコログサが生えていると、今までであれば「エノコログサだ」としか認識しなかったが、今ではその花穂の中に入り込んでいる小さい虫まで見つけられるようになった。ヒゲナガカメムシとヨツボシヒョウタンナガカメムシは、いずれも 1cm もない小さなカメムシの一種で、エノコログサ等イネ科草本の花穂の汁を吸って生きている。水田ではイネの害虫だそうだが、近くに水田のない馬込において、うちの境内でエノコログサを餌にしている分には罪がないといえるだろう。

ヒゲナガカメムシは、何のためなのか前脚だけ異常に太いのが特徴である。体が細くて腕が太いため、ポパイを連想させる体型だ。ヨツボシヒョウタンナガカメムシは、背中の4つの淡色斑が特徴であり名前の由来である。



写真4 ヒゲナガカメムシ



写真5 ヨツボシヒョウタンナガカメムシ

エノコログサの花穂には他にもこの両種より小さいカメムシもいたが、この原稿の締め切りまでにとうとう種名までは解明できなかった。

④オオホシカメムシ

「臭い」というマイナスイメージが先行するカメムシ類であるが、カメムシの中には模様や形がユニークな種や、色がきれいな種も少なくない。模様がユニークなカメムシの一例が、オオホシカメムシである。2cmほどと、名前の通り割合大きいカメムシなので、今までこの神社の境内で見たことがなかったのが不思議だ。このオオホシカメムシの背中の模様、誰かに似ていませんか？ 私が抱いた第一印象は、ネプチューンの名倉潤さんである。



写真6 オオホシカメムシ

⑤ヤニサシガメ

数あるカメムシの中でもとても個性的な特徴をもつものとして、このヤニサシガメがいる。撮影した個体は幼虫だが、幼虫も成虫も名前の通り体表に松脂（マツヤニ）を付着させ、テカテカと輝いている。かつては体表のベトベトはこのカメムシ自身の分泌物と考えられていたが、その後の研究で、本物の松脂を自分で塗り付けていることが判明している。境内にはアカマツの大木があるため、そこが住み家なのであろう。このカメムシに手を触れてはいないが、触るといかにもベトベトしていそうである。



写真7 ヤニサシガメ

ところで、体中に松脂が付いていたら、自分の脚がくっつくなどして動きづらくなるのではと思うが、他の種に見られないほど凸凹のある脚をもつことで、くっつく面積を減らしているのではないかという説がある。つくづくユニークなカメムシである。

⑥ズアカシダカスミカメ

体長わずか2～3mmと、葉の汚れかシミにしか見えない。私が撮影したカメムシ類の中では最小である。体は光沢のある黒色であるが、よく見ると確かに頭だけ赤っぽく見える。シダではない植物の葉上にいた個体を撮影したが、シダを餌とすることからその名前がついたようである。

ところで、こんな微小なカメムシも臭い匂いを出すのだろうか。手に触れるのもためらわれるくらい小さいため触ってはいないが、興味あるところである。



写真8 ズアカシダカスミカメ

⑦エサキモンキツノカメムシ

撮影したカメムシの名前を調べるために、いろいろな図鑑を見たりインターネットで検索したりしているうち、世の中にこんなカメムシがいるなら是非一度会ってみたいと思わせる種がいた。そして嬉しいことに、秋も深まった11月下旬、何とそのエサキモンキツノカメムシご本人と境内で会うことができた。覚えにくい種名だが、エサキは和名と学名を付けた人



写真9 エサキモンキツノカメムシ

物の名前、モンキは「紋黄」、突起のあるツノカメムシの一種なのでこの名前になった。

私がなぜエサキモンキツノカメムシと会いたかったかは、背中模様を見ていただければ一目瞭然である。このカメムシのメスは、卵や若齢幼虫の世話をするということだ。愛情あふれたハートマークは伊達ではないようである。

(2) ハチ目（膜翅目）

同定が難しかったグループの一つがハチ目である。種名が判明してリストに載せることができたのはごくわずかであった。アシナガバチやスズメバチの仲間など、ある程度の大きさがあり模様の違いが見分けやすいものはまだいいが、特徴がなく小さいハチはほとんど全て迷宮入りしている。

また、ハチ目に含まれるのがアリである。境内には明らかに数種のアリが生息していると思われるが、結局ほとんど手つかずで終わってしまった。肉眼、ルーペ、デジカメだけでは手強すぎたのがハチ目であった。

①ニホンミツバチ

境内には小さな末社が4つ建っているが、その内の1つに数年前からニホンミツバチが巣を作っている。時期によっては数多くの働きバチがその末社の周囲をブンブン飛び回るため、お参りに来た人から何とかしてほしいと陳情されたこともある。しかし、危険性があるスズメバチでもあるまいし、駆除する必要性は全くない。そこで、おとなしいニホンミツバチは保護すべき日本の固有種であると掲示したところ、ハチに関する陳情はなくなった。

後年にはニホンミツバチは隣の寺の樹木にも巣作りしたため、「うちにも同じ掲示物がほしい」と頼まれ、差し上げたことがある。



写真10 巣に出入りするニホンミツバチ



写真11 保護推奨の掲示

② スミスハキリバチ

境内にはさまざまな草本植物が生育しているが、その中の一つにマメ科のアレチヌスビトハギがある。ヌスビトハギの仲間は、いわゆる「ひつつきむし」である。そのマメの鞘の表面は、いろいろな方向を向いた鈎のある突起で覆われているため、それによって衣類にくっつくのである。

9月、そのアレチヌスビトハギの葉に多くの丸い食痕を見つけた。しかし、誰が食べたのか、その近辺には食べた本人と思われる虫の姿は全く見えない。

そして9月の末のことである。丸い食痕の謎が解けた。1匹のハチが飛来し、アレチヌスビトハギの葉を噛んで丸く切り取って抱えては、隣の寺の方へと飛び去って行ったのである。ハキリバチの一種だ。あっという間の手際の良さだった。同じ個体なのかはわからないが、その後も何度か飛んで来て、葉を切り取っては飛び去って行った。

葉を切り取って巣材とするハキリバチには何種類かあるが、その体色や、マメ科植物の葉を好むことから、スミスハキリバチと判断した。

アレチヌスビトハギは、葉をあちこちかじり取られて悲惨な状態になったものの、10月中旬には花を咲かせ、その10日ほど後には「ひつつきむし」となる実を付けていた。このハキリバチは、食草を枯死させるまでにはダメージを与えずに利用していたことが分かり、自然界における生物間の絶妙なバランスに感心させられた。



写真12 葉を切るスミスハキリバチ

(3) コウチュウ目（鞘翅目）〔テントウムシ類〕

丈夫なクチクラで形成された外骨格をもつコウチュウ目は、昆虫類の中でも最大の目である。子どもたちに人気のある巨大なカブトムシやクワガタムシから、微小なテントウムシ等まで多彩なグループが含まれる。境内のコウチュウ目には、ハチ目ほどではないが、形態や色彩の似たゴミムシ類など迷宮入りした種も少なくない。ここではコウチュウ目の中からテントウムシ類、タマムシ類、ハムシ類、ゴミムシダマシ類の一部を取り上げたい。

コウチュウ目のうち、意外と多くの種が見られたのがテントウムシ類である。カメムシほ

どではないが、身近にこれほど多くの種がいるとは知らなかった。中には肉眼で点にしか見えない2mmほどの種もいて、その多様性に奥の深さを感じたグループがテントウムシ類であった。

①ナミテントウ

ナナホシテントウとともによく見かける一般的なテントウムシがナミテントウである。同じナミテントウでも模様は何種類もあり、2022年に狭い境内で撮影したものだけでも10種類を超えた。この模様の遺伝はメンデルの法則に従っているという研究結果が発表されており、生物学的に興味深い。

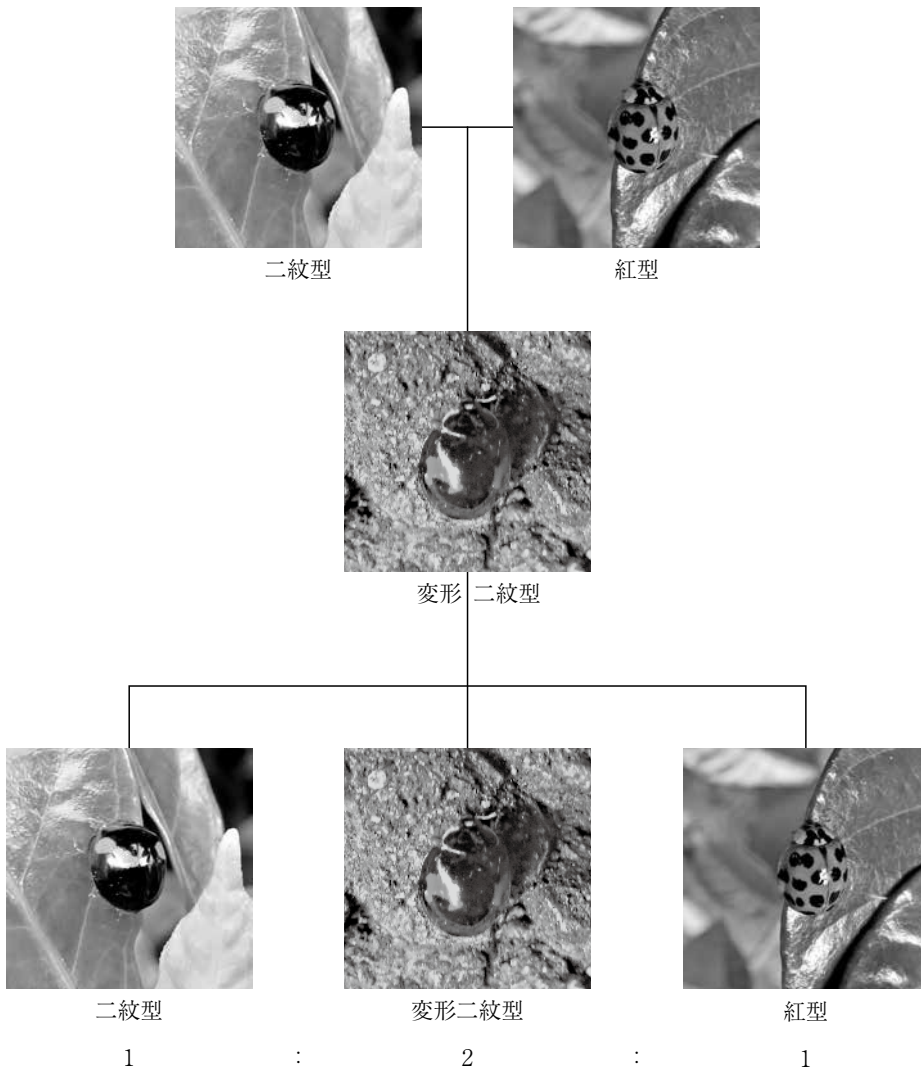


写真13 ナミテントウの遺伝様式の一例

②ダンダラテントウ

今までこれもナミテントウだと思っていたのが、大きさもナミテントウと同じくらいのダンダラテントウである。ダンダラとは「段斑」のことで、黒地に赤い斑紋がある。その斑紋にはさまざまな個体差があるため、やはり模様が多様性があり、大きさがほぼ同じであるナミテントウと間違いやすい。区別するポイントは、触角の先端の形と、羽の縁に反りがあるかないかである。反りがあるのがダンダラテントウ、ないのがナミテントウだ。ダンダラテントウ、ナミテントウ、ナナホシテントウともに、成虫も幼虫もアブラムシを食べる益虫である。



写真14 ダンダラテントウ

③ムーアシロホシテントウ

本格的に昆虫の観察と撮影を始めて、初めて名前を知った種の一つが、黄褐色地に白斑をもつムーアシロホシテントウである。前胸背板には4個の白斑があり、上翅の白斑は頭側から4・4・4・2と、14個が4列に並んでいる。上翅の上から2列目の白斑は、中央の2個の間隔が広いのが本種の特徴だ。

ナナホシテントウなど黒斑のテントウムシを見慣れているせい、白い水玉模様はとてもおしゃれな印象を受ける。ちなみにこのムーアシロホシテントウ、バタ臭い名前ではあるが、外来種ではない。



写真15 ムーアシロホシテントウ

④コクロヒメテントウ

概して小さくて弱い虫は、逃げ足が速い。すぐに葉の裏に隠れたり、飛んで逃げたり、落下して姿をくらます。そんな昆虫の一種がコクロヒメテントウである。黒くて2mm ちょっとなかなか小さなテントウムシだ。成虫だけでは同定に自信がもてなかったが、見つけたクチナシの芽近くには特徴あるコクロヒメテントウの幼虫もいたため、おそらく間違いないと思われる。ちなみにコクロヒメテントウもまた、成虫も幼虫もアブラムシを食べる益虫である。



写真16 コクロヒメテントウ (成虫)



写真17 コクロヒメテントウ (幼虫)

(4) コウチュウ目〔タマムシ類〕

金属光沢をもつ緑色の美しいタマムシは、多くの人が知っている昆虫であろう。正確にはヤマトタマムシという種である。残念ながら境内でヤマトタマムシを見たことはないが、タマムシ科の昆虫は数種類生息していることを確認した。

①ムツボシタマムシ

2020年の春、コロナウイルス感染拡大のために緊急事態宣言が発令され、しばらく自宅待機の期間が設けられた。その時にはこの2022年ほどではないが、時折カメラを持って境内を散策していた。そして、それまで普段あまりじっくり見ることもなかった木の葉の上で初めて見つけたタマムシが、ムツボシタマムシだった。



写真18 ムツボシタマムシ

2022年5月中旬、この春もムツボシタマムシと出会うことができた。3～4cmあるヤマトタマムシと比べ、ムツボシタマムシは1cmほどしかない。とはいえ黒っぽい体表にはタマムシ科らしい金属光沢があり、上翅にある6個の黄緑色の斑がとても美しい。ヤマトタマムシよりは控え目だが、なかなかセンスのいいデザインだと思う。

②シロテンナガタマムシ

ムツボシタマムシを見つけたのとほぼ同じ場所で、そのすぐ翌週に出会ったのがシロテンナガタマムシである。ムツボシタマムシより体長がやや小さく、また、体型が細いため、比較的小さく感じられる。決して強くないがタマムシ科らしく金属光沢を帯びた黒っぽい上翅には、3対6個の白色紋がある。全体的に「渋いタマムシ」といった印象だ。



写真19 シロテンナガタマムシ

③コウゾチビタマムシ

小さなチビタマムシの一種の存在には、この年に初めて気が付いた。わずか3mm程と小さいものの、タマムシ科らしく金属光沢が強い。出会う回数が少なかったムツボシタマムシやシロテンナガタマムシとは異なり、このチビタマムシの一種は何か月にも渡って、いつも同じ草本植物の葉の上でその姿を見ることができた。

見かける機会が多いとはいえ、このチビタマムシの種名の同定は困難を極めた。そもそも体長が小さい上に、チビタマムシには種類が多く、お互いに形態や色彩が似通っているからである。

こういう場合は、食草が手掛かりとなる。大学時代の同期で、私と違って植物に詳しい田中正人氏に聞いてみた。世田谷区で造園業を営む田中氏から、このチビタマムシがいつもいる草本植物は、クワ科のクワクサだと教えてもらった。権威あるむし社の『日本産タマムシ大図鑑』によると、チビタマムシの中でクワ科の植物の葉を食べるのは、コウゾチビタマムシだけである。(コウゾもクワ科。) また、同書によれば、コウゾチビタマムシの原産地は、東京都世田谷区砧とのこと。大田区のすぐ隣が世田谷区であり距離的に近いことから、コウゾチビタマムシと判断して間違いないであろう。



写真20 クワクサを食べるコウゾチビタママシ

(5) コウチュウ目〔ハムシ類〕

甲虫類の中でもハムシには小さい種が多く、注意していないとあまり気が付かないグループである。今回撮影したハムシのうち、最も出現頻度の高いクロウリハムシ以外は、全て初めて確認できたハムシであった。その中でも特筆すべき種として、ルリナガスネトビハムシを紹介したい。

イヌホオズキの葉の上にいたルリナガスネトビハムシは、私が今まで抱いていたハムシを含む甲虫の常識を覆す存在であった。甲虫であるのに、バッタやキリギリスのような特徴もっているのだ。3～4mmと小さい瑠璃色のその体をよく見ると、後脚が異様に太く長い。そして、接写しようとカメラのレンズを近づけたとき、何とジャンプして逃げたのである。バッタなどと同様にジャンプする甲虫が存在する事実を初めて知った。そして、これでこの虫の種名の由来がよくわかった。



写真21 イヌホオズキの葉上のルリナガスネトビハムシ

(6) コウチュウ目〔ゴミムシダマシ類〕

境内において最も個体数を多く見かける甲虫類はというと、それはおそらくサトユミアシゴミムシダマシであろう。かつてはユミアシゴミムシダマシやユミアシオオゴミムシダマシという名前も使われていたが、2017年刊行の『日本産ゴミムシダマシ大図鑑』（むし社）によれば、新称としてサトユミアシゴミムシダマシの名前で記載されている。

サトユミアシゴミムシダマシは、黒くて3cmほどもある甲虫の一種である。夜行性なので日中は見かけないが、夜になると出没する。前脚が弓状にカーブしていることから、「ユミアシ」というらしい。また、前胸背板に明瞭な正中溝がある点などが近似種との違いである。夜な夜な境内にあるスタジイの朽ち木にたくさん集まり、その表面をかじっている。幼虫も朽ち木の中で生活しているようだ。成虫に懐中電灯の光を当てると嫌がるが、逃げ足が速いわけではない。

サトユミアシゴミムシダマシは特別体色がきれいなわけでもなく、体型がかっこいいわけでもないが、朽ち木の限られたエリアに毎晩集まっていて数えやすいことから、この種だけ個体数をカウントしてみた。21:00前後に出現個体数をカウントするとともに、Yahooのお天気アプリで21:00の大田区の気温を記録した。合計140日間カウントした結果は図1の通りである。カウントを始めた5月26日から11月26日まで、いくつかのピークを繰り返しつつ出現していることが分かる。特に7月から8月と、9月から10月にかけての出現個体数が多い。一方、気温との明らかな相関は認められなかった。

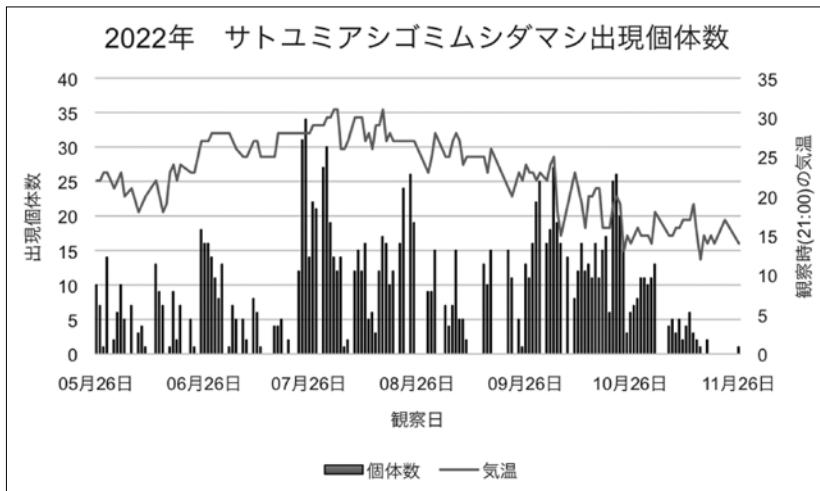


図1 サトユミアシゴミムシダマシ出現個体数



写真22 朽ち木に集まるサトユミアシゴミムシダマシ

(7) チョウ目（鱗翅目）〔チョウ・ガ類〕

チョウ目のうち境内で見られるチョウ類の種はそれほど多くはなく、また、一般的な種ばかりなので、同定には困らなかった。一方、ガ類の同定には苦労した。特に、小さい種や模様がなくて地味な種はお手上げで、多くが迷宮入りしている。

同定できたチョウ目の中から、生息域の拡大が特徴的なチョウ類2種と、ビジュアル的に特徴のあるガ類3種を紹介することにする。

① ツマグロヒョウモン

ヒョウモンチョウの中で、市街地で最も多く見かける種がツマグロヒョウモンである。元々は南方系のチョウであるが、幼虫が園芸植物として身近なパンジーなどのスミレ類を食べることから、園芸植物に紛れて分布を広げたとされている。また、その生息域の拡大には、地球温暖化が影響しているとも考えられている。1980年代までは近畿地方以西しか分布していなかったが、徐々に北上し、1990年代以降に南関東に達した記録がある。

メスは名前の通り前翅の端が黒く、他のヒョウモンチョウや同種のオスと容易に見分けられる。この配色は、体内に毒をもつチョウのカバマダラ類（カバマダラやスジグロカバマダラ）に擬態（標識的擬態）していると考えられている。しかし、カバマダラ類は南西諸島では見られるものの本州まではまだあまり北上していないため、本州ではその擬態は機能していないといえる。



写真23 ツマグロヒョウモン（メス）



写真24 スジグロカバマダラ

（伊丹市昆虫館にて撮影。2023.1.23）

② クロコノマチョウ

9月下旬の夕方、今まで境内で見たことのない、茶褐色の比較的大きなチョウを見かけた。ジャノメチョウの仲間のクロコノマチョウである。ツマグロヒョウモンと同様に、温暖化のために国内で生息域を北上させているといわれているチョウである。しかし、ファッショナブルな体色のツマグロヒョウモンと比べると、翅を閉じて日陰にたたずむクロコノマチョウはとても地味で目立たない。

クロコノマチョウは雑木林や里山のような環境にしか生息していないと想像しただけに、

うちの境内で出会った瞬間は驚いた。早朝や夕方涼しくなってから行動するチョウのようで、出会ったのはまさにそのタイミングにマッチする状況だった。



写真 25 クロコノマチョウ

③マダラツマキリヨトウ

ガ類には地味で同定困難な種が多い中、初めて見るとも派手な模様のガがいた。ヤガ科のガの一種、マダラツマキリヨトウである。灯火に飛来した個体が、のんびり昼過ぎまで残っていたのであろう。体長1.5cmほどのマダラツマキリヨトウ、その色彩鮮やかな翅に加えて、毛が多く生えた前脚を広げた姿は、豪華な衣装を身にまとった歌舞伎役者か演歌歌手を彷彿とさせる。幼虫はシダ類を食べるが、境内でこれまでに幼虫を見たことはない。



写真 26 マダラツマキリヨトウ

④ブドウトリバ

一般に体長1cmほどと小さいトリバガ科のガは、静止しているとき、まるでカのように見えるガである。翅をたたんで細くするため、細い体とともにTの字のような姿をしている。翅を広げると、前翅は2片、後翅は3片の細い羽状の翅に分かれる。この羽状翅をもつことから鳥羽蛾というのであろう。

さて、そのトリバガ科の中で時折見かけるのがブドウトリバである。前脚と中脚でとまり、後脚は体に沿うように後方へと伸ばしている。その後脚には目立つ大きな棘があるが、これは体を守るためなのだろうか。

名前にある通り、幼虫はブドウに付くが、ヤブガラシなどの草本も食べるため、割とあちこちに分布するようである。同じく境内で見かけるヒルガオトリバとともに、もし並んでとまっていれば、まるで昆虫界の TT 兄弟といった感じだ。



写真 27 ブドウトリバ

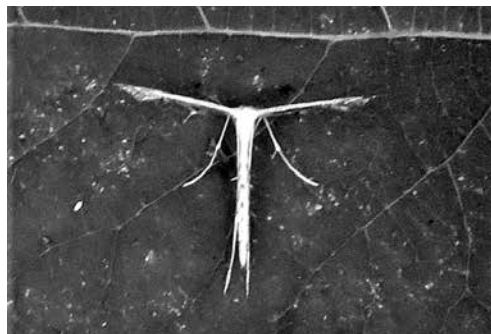


写真 28 ヒルガオトリバ

⑤ホシヒメハウジャク

夜間の涼しさが感じられるようになった10月末のこと、車庫の灯火に珍妙な姿のガを発見した。光に引き寄せられて飛んで来たのだろうが、とても空を飛べそうなスタイルには見えない。調べてみると、スズメガ科のホシヒメハウジャクである。

スズメガの多くは、いかにも力強く飛翔できそうなカッコいい体型をしているのに対して、ホシヒメハウジャクは小さく縮んだように見える翅をもち、胴体が異様に幅広く、なぜか尻の先が反り上がっている。よくこの車庫まで飛んで来られたものだと思ったが、文献によれば他のスズメガ同様ホバリング（空中停止）しながら花の蜜を吸うこともできるそうである。飛べそうに見えないのに飛べるという点では、子どもの頃にテレビでサンダーバード2号を見たときに抱いた印象に近い違和感を覚えたガであった。



写真 29 ホシヒメハウジャク

(8) クモ目

昆虫類の体の基本構造は、頭・胸・腹の3つの部分からなり、胸部から3対6本の脚が生えている。一方、クモ類は、頭胸部と腹部の2つからなり、頭と胸は明瞭には分かれていない。

そして、頭胸部から4対8本の脚が出ている点の特徴である。複眼が一般的な昆虫類に対し、クモ類は単眼を8個もつものが多い。

分類学的には「昆虫」に含まれないが広義の「虫」に含まれるクモ類も、境内で出会った際には写真を撮影してきた。今まで勉強不足のグループであるが、同定できたクモの中からその一部を紹介したい。

①アシダカグモ

アシダカグモは、おそらく出会った全ての人が驚くクモといえるだろう。とにかく大きくて迫力があるクモだ。網で巣を作らない徘徊性のクモとしては本土で最大種である。以前行きつけの床屋のご主人が、「このクモ何ですか」と捕獲したアシダカグモを見せてくれたことがある。オスは背中に1対の黒斑があり体長（頭胸部と腹部の長さ）は2cm、メスは3cmほどだが、脚が太くて長いためオスもメスももっと大きく感じる。子どもの手のひらほどもあるこのアシダカグモ、意外にもその動きは極めて俊敏だ。床屋のご主人も、よく捕まえられたものである。

大きくて敏捷なアシダカグモではあるが、調べてみると、意外なことに天敵が存在する。2.5cmほどと、アシダカグモより小さいツマアカクモバチである。このツマアカクモバチ本人とは、境内では8月末に出会っている。腹部の先端半分ほどが赤く目立つハチであるが、何とアシダカグモを毒で麻痺させ、地中に引きずり込んで産卵する。そのクモは、生まれてきたハチの子どもの餌となる運命が待っている。境内には今まで知らなかった食物連鎖の例が、いろいろと存在するものだ。

さて、このアシダカグモは、よほどクモが好きの人以外は追っ払いたくなる存在かもしれない。しかし、アシダカグモはゴキブリを捕ってくれる有難い益虫なのである。実際に私も、このクモがゴキブリを捕獲したところを確認したことがある。夜の境内では、屋外においてもクロゴキブリ（家屋に一般的なゴキブリ）の姿をしばしば目にするので、今後もアシダカグモには頑張ってほしいものである。

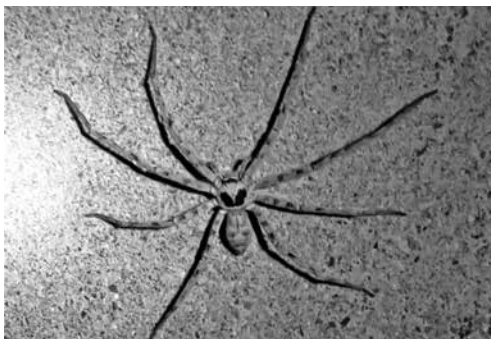


写真30 アシダカグモのオス



写真31 卵囊を抱えたアシダカグモのメス

ところで、このアシダカグモが白くて丸い物体を抱えているところを何度か見た。これは卵囊というもので、中に卵がたくさん入っている。アシダカグモのメスは、産卵後に卵を含む卵囊を幼虫がふ化するまで大切に抱えて守る、意外な母性本能の持ち主なのである。

②アリグモ

アリグモはその名前の通り、アリに擬態したクモである。6～7mmで、アリのように黒くて細長い体をしている。面白いのは、8本の脚のうち前方の2本を、まるでアリの触角のように上に高く突き出していることだ。また、アリグモは頭胸部がくびれ、あたかも明らかに頭部と胸部が分かれているアリの姿に似せている。さらに興味深いことに、葉上を徘徊する歩き方までアリに似せる芸の細かさをもっており、糸を出して下に降りるまでクモとは気付きにくい。オスは上顎が太く長いのが特徴である。



写真 32 アリグモ (メス)

③各種のハエトリグモ

網の巣を作らない徘徊性のクモとして屋内外を問わず最もよく目にするのが、小さなハエトリグモの仲間である。その多くが体長1cm以下であり、チョコチョコ歩く姿はかわいらしい。また、ハエトリグモの仲間は、単眼8つのうち大きい2つが前方に向いているため、とてもかわいい顔に見える。

今回の観察、撮影を通して、ハエトリグモには20種以上もあることや、その多くがオスとメスとで模様が異なることを知った。ちなみに、前掲のアリグモもハエトリグモ科に属するクモである。

ところで、ハエトリグモは小さいが、名前の通り本当に自分と同じくらいの体長があるハエを捕るのかと疑問に思う人がいるかもしれない。撮影できたハエトリグモ4種のうち、アダンソンハエトリとシラヒゲハエトリについては、それぞれハエを捕らえたところを確認している。

ちなみに、アダンソンハエトリは、フランスの博物学者ミシェル・アダンソンへの献名だそうで、外来種っぽい名前ではあるが、日本の在来種である。



写真33 ネコハエトリ (メス)



写真34 メスジロハエトリ (メス)



写真35 ハエを捕らえたアダソンハエトリ (メス)

4、確認できた外来種

外来種とは、元々その場所にいなかったが、人為的に他の地域から持ち込まれた生物種の中で、意図的でなくとも人間活動の関与により移入した種を意味する。原則的には明治時代以降の渡来種を指すようである。外来種は、その地域の生態系に影響を与えるだけでなく、人体や農林水産業などにまで悪影響を及ぼす場合もある。外来種問題については高校の「生物基礎」や「生物」の教科書でも取り上げられているため、身近な昆虫での具体例を調べることは意義深いといえる。

ここでは、外来種リストに掲載されている昆虫類のうち、2022年に馬込八幡神社境内で観察、撮影できた全14種を紹介したい。なお、クモ類に関しては、外来種に該当するものは確認できなかった。

(1) ゴキブリ目

意外なことに、代表的な衛生害虫であるクロゴキブリは外来種に含まれる。いつ頃移入したのかは不明だが、中国南部から貨物に混じって移入したと推測されている。

クロゴキブリは、境内にある拙宅内以外に、社殿や社務所等の周囲、すなわち屋外でもしばしば出没する。朽ち木の表面やクチナシの花の上でも見たことがあり、雑食性であることがよくわかる。

痛快なのは、ヤモリやアシダカグモがクロゴキブリを捕食している瞬間に出くわした時だ。クロゴキブリがあまり増えすぎないように、その個体数を調整してほしいものである。



写真36 クロゴキブリを捕食するヤモリ



写真37 クロゴキブリを捕食するアシダカグモ

(2) カメムシ目 (半翅目)

①キマダラカメムシ

春先からよく目にするカメムシが、カメムシ科で元来東南アジアや台湾に生息するキマダラカメムシである。体長2cm程で、典型的なカメムシの形態をしている。茶褐色の成虫には小さな黄色斑が散在していて名前通りの外見であるが、灰色地の幼虫の背中には大きな黒点があって、まるで一つ目の宇宙人のように見える。

ところで、このキマダラカメムシ、日本では江戸時代に長崎の出島で1770年代に初めて確認され、1783年に初めて記録された。この時採集して新種登録したのは、シーボルトやケンペルとともに「出島の三学者」と称されるスウェーデンのツンベルクである。ツンベルクは、二名法による学名の提唱者で有名なリンネに師事した博物学者であり、出島では医師として勤めていた。酵素の発酵実験に用いるツンベルク管という密閉試験管の考案者でもある。

「出島では極めて普通」と記載があったこのカメムシは、なぜかその後150年間発見されず、1934年頃に長崎県の各地で見つかった。その後北上を始め、2000年以降には本州に進出、2008年には初めて東京都でも記録された。このキマダラカメムシの分布拡大にも地球温暖化が影響しているという説がある。

ところで、本来外来種は明治時代以降に渡来した種を指すといわれているのに、江戸時代に渡来したキマダラカメムシをなぜ外来種に含めるのか、という意見がある。これは、発見された当初から一時期生息状況が不明となり、再発見されたのが昭和初期だったことが理由のようである。初記録から240年くらいかけて地道に北上し続けてきたキマダラカメムシの生きる力は、ある意味賞賛に値するかもしれない。



写真38 キマダラカメムシ (成虫)

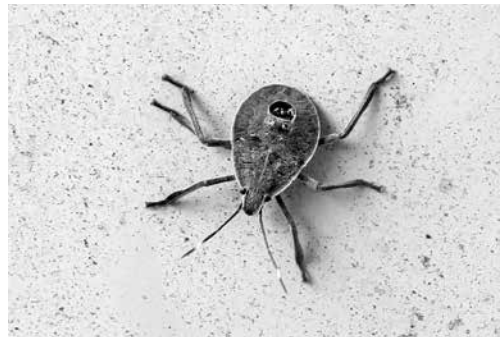


写真39 キマダラカメムシ (幼虫)

②アワダチソウゲンバイ

カメムシ目のゲンバウムシ科に属する昆虫は、一般に5mm以下と小さく、多くは軍配の形をしたグループである。特定の植物を摂食するゲンバウムシは、その種名に植物名が付いている。体長3~4mmのアワダチソウゲンバイもその一種だ。肉眼とルーペだけでは同定に自信がもてなかったが、セイトカアワダチソウの葉の上にいたため、アワダチソウゲンバイと判断した。

アワダチソウゲンバイは北米原産の外来種で、1999年に兵庫県西宮市で初めて記録されている。境内で発見した時のように、セイトカアワダチソウに付くだけならよいが、ナスやサツマイモにも加害するという報告もあり、農家や園芸愛好家にとっては招かれざる客といえそう。



写真40 アワダチソウゲンバイ

③クスベニヒラタカスミカメ

10月中旬のこと、玄関の外灯に見慣れない6～7mmの小虫がいた。体色の一部と触角が赤く、首が長く見える。調べてみると、カメムシ目カスミカメムシ科の外来種、クスベニヒラタカスミカメと分かった。元々中国が原産で、2015年に国内で初めて大阪府岸和田市で、また、ほぼ同時期に兵庫県伊丹市で発見され、関西を中心に分布を広げているらしい。名前通りクスノキに付き、その吸汁被害によって落葉が早まるそうである。常緑樹であり本来あまり落葉しないクスノキが激しく落葉することから、街路樹や公園にクスノキの多い西日本では大きな問題となっているようだ。境内にもクスノキが数本あるため、そこで繁殖している可能性は少なくないが、今のところ目立つ落葉は見られない。

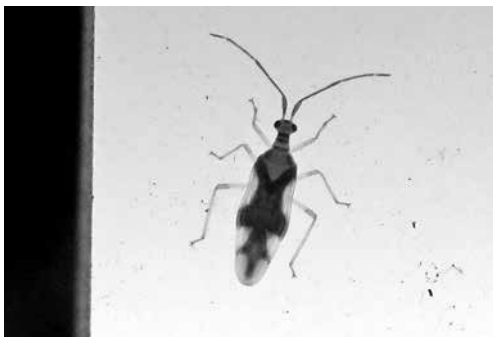


写真41 クスベニヒラタカスミカメ

④マツヘリカメムシ

11月初旬、また玄関の外灯に見知らぬカメムシがいた。体長2cm程で全体が赤っぽく、後脚に見られるオール状の葉状片が目新しい特徴である。調べてみると、マツヘリカメムシという外来種だった。北米大陸西部が原産とされ、日本では2008年東京都小金井市の記録が最も古いようだ。

赤っぽい派手な配色といい、オール状に広がった後脚といい、何となくアメリカのファッションを連想させるこのマツヘリカメムシ、北米原産というのが実にマッチしていて面白い。

なお、マツ類に付くといわれているが、境内のアカマツとの関連は不明である。



写真42 マツヘリカメムシ

⑤アミガサハゴロモ近似種

6月下旬、拙宅のフェンスに体長1.5cm程の一見ガのような昆虫がいた。近づいて見ると、ガではなくハゴロモの一種とわかった。カメムシ目には、カメムシ科とは全く形態の異なる科も多く含まれるが、ハゴロモ科もその一つである。ハゴロモの仲間にしては随分体長の大きいこの虫は、茶色に白斑があり、その三角形の体型はステルス機を彷彿とさせる。セミ類もカメムシ目に含まれるグループであり、このハゴロモも顔だけ見ればセミそっくりだ。

ところで、このハゴロモ、図鑑にある日本在来種のアミガサハゴロモに似てはいるが白斑の形が違う。アミガサハゴロモの白斑が翅の縁から内側に伸びているのに対し、このハゴロモの白斑は翅の縁に沿って長い。ネットで検索してみると、「アミガサハゴロモ似の外來種」という記載が何件もヒットした。私が検索によく使わせてもらっている岐阜聖徳学園大学で開設している理科教材データベースの昆虫図鑑によると、2018年頃から国内で確認されるようになったアミガサハゴロモ属の外來種で、和名はまだ付けられていない。学名はというと、中国での記載では *Pochazia shantungensis* となっているが、台湾や東南アジアでは *Richanula sublimata* となっているらしい。

9月には、クワの木にいる幼虫も見かけた。白いモフモフの体をしている。このクワの木



写真43 アミガサハゴロモ似の外來種（成虫）



写真44 アミガサハゴロモ似の外來種（幼虫）

では成虫も何度か目にしているのので、親子ともに好きな場所のようだ。

ちなみに、この原稿の執筆を始めた2022年12月下旬時点で、理科教育データベースを運営されている岐阜聖徳学園大学の川上紳一教授に問い合わせたところ、同種の和名はまだ決まっていないとのことだった。

(3) コウチュウ目（鞘翅目）

①モンクチビルテントウ

この2022年、一連の観察、撮影を実施して、思っていたよりも多くのテントウムシ類が境内で見られたが、そのうち2種が外来種であった。わずか3mm程の小さなモンクチビルテントウは、初めは日本固有種のヨツボシテントウかと思っていた。しかし、よく見ると、黒紋が横長で大きい点がヨツボシテントウとは異なっている。

モンクチビルテントウは、元々はベトナムや台湾、中国に分布している種だが、1998年に沖縄への侵入が確認され、その後北上を続けているようだ。境内では5月から9月にかけてたびたび出現した。こんな小さなテントウムシで、しかも在来種と酷似している外来種の侵入に最初に気付いた研究者は本当に偉いと思う。



写真45 モンクチビルテントウ

②クモガタテントウ

もう一種の外来テントウムシも、やはり3mm弱と小さいクモガタテントウである。雲のようなはっきりしない模様をしているテントウムシだ。9月から12月の初めまで、クワの木で見られた。とても小さい上に、葉の裏に隠れていることが多く、なかなか発見しづらい種である。

調べてみると、クモガタテントウはうどんこ病菌などを食べる菌食性とのことなので、益虫のテントウムシといえる。

クモガタテントウは、1984年に東京都大田区の東京港付近で見つかったのが最初の記録で、北米からの移入種といわれている。発見場所からして、貨物に紛れての移入であろう。



写真 46 クモガタテントウ

③タバコシバンムシ

9月上旬のある夜、境内の植物の葉の上に、とても小さな赤茶色の虫を見つけた。暗くて撮影が難しかったため、手製の観察ケースに入れて持ち帰り、書斎にて観察、撮影を行った。脚を縮めてじっとしていると、細かい豆粒にしか見えない。観察途中で翅を開いた瞬間、甲虫であることがようやく実感できた。

調べてみると、この2mmほどの極小昆虫は、輸入乾物に混じって移入したと推定されているタバコシバンムシであることが分かった。原産国も不明の、さまざまなものに食害を与える招かれざる客のようだ。名前の煙草だけでなく、穀粉、乾麺、香辛料、乾燥食品、ウール等の動物繊維から畳まで食べるという。屋内で発見した虫でなかったのが幸いである。

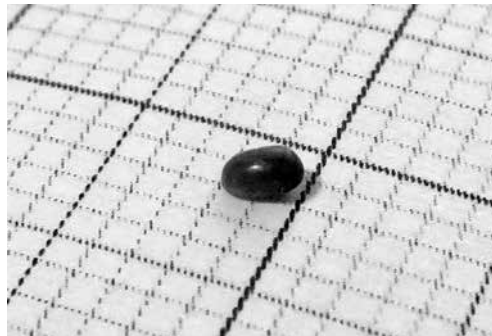


写真 47 観察ケース中のタバコシバンムシ

(4) ハエ目 (双翅目)

①アメリカミズアブ

境内にいたアメリカミズアブは、体長2cm程の全身黒色のアブの一種である。名前の通り原産地は北米～中米で、日本には1950年頃の侵入とされる。

このアメリカミズアブ、実は人類に役立つ昆虫と分かった。意外にもその幼虫は栄養価が高く、大量養殖が可能であることから、家禽や養殖魚の飼料、さらには両生類・は虫類等のベットの餌として加工され、利用されているそうだ。現在国学院高校の生物部で飼っている

生き物の餌にも含まれているかもしれない。一方の成虫はというと、口がないため餌を食べず、当然噛んだり刺したりもしない人畜無害の昆虫である。



写真48 アメリカミズアブ

②オオチョウバエ

屋内でも時々見かけるのがオオチョウバエだ。体長5mmほどで、翅がハート型に見える虫である。見た目はハート型であっても、衛生害虫、不快害虫として扱われている。写真のオオチョウバエは、外灯に飛来した個体を撮影したものである。

オオチョウバエは、1962年に神奈川県で発見された個体が最初の記録ということだ。貨物に混入して移入したと推測されている。



写真49 オオチョウバエ

(5) チョウ目（鱗翅目）

①アカボシゴマダラ

10年以上前から境内での繁殖を確認しているチョウが、タテハチョウ科のアカボシゴマダラである。食樹のエノキが境内に数本あるため、卵、幼虫、蛹、成虫と、完全変態の全ての過程を観察することができる。

成虫の夏型は、モノトーンの翅に赤色斑が混じる、なかなかおしゃれなチョウである。境内で見られるチョウの中でも、その見映えは被写体としてトップクラスといえるだろう。不思議なことに、アカボシゴマダラの春型には、名前に反して赤色斑はほとんどなく、全体が白っぽい涼しげな色調となっている。

一方、このチョウの幼虫も個性的なスタイルをしており、特徴ある2本の長い角をもっている。身近で観察、撮影したいと思う人がいても当然であろう。

だが、成虫であれ幼虫であれ、このアカボシゴマダラを絶対に採集してはいけない。2022年に境内で撮影した外来種14種の中で、このアカボシゴマダラだけが環境省の外来生物法により、アライグマやマングース、カミツキガメ、オオクチバスなどと同様の特定外来生物に指定されているからだ。そのため、飼育、運搬、野外に放す、譲渡する等の行為は法律違反となり、罰せられてしまうのである。

そもそもアカボシゴマダラは中国や朝鮮半島、ベトナム等のアジアに広く分布しており、日本国内では奄美大島などに固有の亜種が生息しているだけだった。問題となっている外来種のアカボシゴマダラは、1995年に埼玉県で発見されて以来、関東地方を中心に生息域を拡大していった。愛好家による人為的な放蝶（ゲリラ放蝶）が原因といわれている。国蝶のオオムラサキとの間で食樹のエノキをめぐる種間競争が生じたり、近縁で日本固有のゴマダラチョウとの交雑が起きる危険性が問題視されている。そのため、2018年に特定外来生物に指定されるに至ったのである。

アカボシゴマダラ自身に罪は全くない。毎年複雑な思いで境内での観察、撮影を繰り返している。



写真50 アカボシゴマダラ（成虫、夏型）



写真51 アカボシゴマダラ（幼虫）

②アメリカシロヒトリ

すでに虫好きだった子どもの頃から名前を知っている外来種に、アメリカシロヒトリがある。ヒトリガ科の白いガで、アメリカ軍の軍需物資とともに渡来したといわれている。終戦の年、1945年に東京で初めて発見され、その後各地に生息域を広げていった。繁殖力が強く、幼虫はサクラ、カキ、ヤナギなど多くの種類の樹木に食害を与えるガであるが、幸い境内で幼虫の姿を見たことはない。撮影した成虫は、灯火に引かれて飛来した個体であろう。



写真52 アメリカシロヒトリ

③アメリカピンクノメイガ

9月末のこと、体長1cmほどでピンク色の鮮やかなガが外灯に飛来していた。最初は在来種のマエベニノメイガかと思ったが、体の中心近くが黄褐色のマエベニノメイガに対してほぼ全身がピンク色をしているため、外来種のアメリカピンクノメイガと分かった。

アメリカピンクノメイガは、2019年に岐阜県で初めて発見されて以来、各地で目撃が報告されている。幼虫の食草がサルビアやセージとのことなので、パンジーなどスミレ類を食草とするツマグロヒョウモンのように、栽培されたそれらの園芸植物とともに生息域を広げてきたのかもしれない。境内で観察、撮影した14種の外来種の中では、日本で確認された記録が最も新しい種が、このアメリカピンクノメイガであった。



写真53 アメリカピンクノメイガ

5、まとめ

(1) 2022 年に撮影し、種名が判明した昆虫・クモ類は 180 種以上

2022 年 4 月末から 12 月初めにかけて撮影した昆虫・クモ類は、名前が判明した種だけで 180 種以上にも及んだ。過去に撮影したことのあるトンボ目のオニヤンマやシオカラトンボ、バッタ目のアオマツムシ、カマキリ目のオオカマキリ、ハチ目のセイヨウミツバチやオオスズメバチ、コウチュウ目のナナホシテントウやゴマダラカミキリ、チョウ目のカラスアゲハ、コムスジ、オオミズアオ、コシアカスカシバ、アケビコノハ、モンクロシヤチホコなどこの年に撮影していない種を含めると、これまでに 200 種以上の昆虫・クモ類をこの狭い境内で撮影してきたことになる。今回同定できなかつた種を含めると、さらに多くの種が生息または一時的に滞在していたことになり、今後観察する機会を増やせばさらに種数は増えていくことであろう。

(2) 境内で見られた外来種は 14 種

一連の観察、撮影を通して、狭い境内ではあるが、総合的な生物種の豊富さを改めて思い知らされたとともに、予想以上の外来種の多さも驚きだった。しかもそのうち 3 分の 2 は、2022 年の観察、撮影で初めて種名を知った昆虫であった。気が付かないうちに日本の生態系が変化しつつあることを実感した。この外来種に関しては、調べようと思ってもまだ図鑑に詳しく載っていない種が多く、新しい情報を得るためにはネットでの検索がとても役に立った。

(3) 種の同定は難しい

撮影した昆虫・クモ類の半数近くは、同定できずに迷宮入りしている。小さい種、類似種の多い種、地味で特徴のない種は本当にお手上げであった。これには昆虫やクモ類に関する知識の乏しさと同時に、写真の腕の素人ぶりも関係していると思われる節がある。細部までもう少しははっきり写っていれば種名が特定できたのに、と悔やまれる写真が何枚もあったからである。近似種のいる昆虫の中には、脚の棘の有無や部分的な色の違い、触角の節の細かな部分の長さの違いなどが同定の決め手となる場合もある。採集して標本を作るわけではないので、本来はいろいろな角度から撮影すべきだったであろう。とはいえ、微小種の発見や撮影はなかなか難しい。目も悪くなってきているため、写真撮影技術の向上は今後の大きな課題といえるだろう。

6、おわりに

勉強不足だった私が今回初めて気付いたことがある。今まで1種だけだと思っていたものが、実はその名前は総称であって、さらに細かく何種類にも分類されている場合が多いことを初めて知った。このように、これまで考えていた以上の分類の細かさもまた同定の高いハードルとなった。何分一切標本にはせずに、ほとんどがその場での観察と写真のみによる同定である。同定ミス等お気づきの点があればご指摘いただきたい。

ところで、昆虫やクモ類の観察を通して、生物間の関係について改めて気付いたことある。高校の「生物基礎」や「生物」の授業では、共生や種間競争、食物連鎖における被食者・捕食者相互関係など、生態系内には生物間の密接で多様な相互作用が存在することを学習する。境内ではまさにその好例がいくつも見られた。また、食べることで植物を利用するヤニサシガメやスミスハキリバチなどの、植物と動物の面白い関係を知った。さらには、それまで名前もろくに知らなかった植物、クワクサにはクワクサを食べるコウゾチビタマムシが、イヌホオズキにはルリナガスネトビハムシが依存しており、地味なシダ類にもそれを食べるズアカシダカスミカメがいるなど、多様性をもつ複雑な生態系のバランスを維持するためには「自然界に無駄な種など存在しない」といえるのではないかと思った。そう考えるとやはり心配なのが、そのバランスを崩しかねない外来種の移入である。調和の取れた多様性であればよいのだが、外来種が日本古来の生態系に悪影響を及ぼす危険性は否定できない。今後も外来種の動向については注目すべきであろう。

虫たちとの出会いは一期一会である。たまたまある日のその時間だけ会えて、その瞬間以外会えないということも多々ある。一方、生息しているがまだ出会っていない虫も当然いるであろうし、偶然境内を通過するだけの種もまだまだ多く出てくるであろう。

今回一連の観察や撮影をしていた期間中、新顔の虫との出会いは、毎回私にとって結構な癒しとなった。2023（令和5）年度も、ストレス解消と教材研究の日課を是非続けていきたいと考えている。「ベイトトラップ法」も一度試みてみたいものだ。また、常連客であるサトユミアシゴミムシダマシの統計的な調査は、開始時期を早めて継続するとともに、さらに深く探究してみたい。今後も馬込八幡神社の境内を管理する神主として、昆虫やクモ類を含む境内における生態系の把握と、その持続的な保全に努めていきたいものである。

参考文献

- ・安永智秀、日本原色カメムシ図鑑陸生カメムシ類〔第1巻〕、全国農村教育協会、1993
- ・安永智秀、日本原色カメムシ図鑑陸生カメムシ類〔第2巻〕、全国農村教育協会、2001
- ・安永智秀、日本原色カメムシ図鑑陸生カメムシ類〔第3巻〕、全国農村教育協会、2012
- ・岸田泰則、日本の蛾、学研プラス、2020
- ・岸田泰則、日本産蛾類標準図鑑 1、学研教室出版、2011
- ・秋田勝己他、日本産ゴミムシダマシ大図鑑、むし社、2017
- ・阿部浩志他、くらべてわかる甲虫、山と溪谷社、2019
- ・黒澤良彦他、山溪フィールドブックス⑬甲虫、山と溪谷、1997
- ・大桃定洋、日本産タマムシ大図鑑、むし社、2013
- ・尾園暁、ハムシハンドブック、文一総合出版、2014
- ・馬場友希他、クモハンドブック、文一総合出版、2015
- ・馬場友希他、クモの巣ハンドブック、文一総合出版、2021
- ・槐真史、バッタハンドブック、文一総合出版、2017
- ・奥山風太郎、鳴く虫ハンドブック、文一総合出版、2016
- ・藤丸篤夫、ハチハンドブック、文一総合出版、2014
- ・寺山守、アリハンドブック 増補改訂版、文一総合出版、2018
- ・福富宏和他、タマムシハンドブック、文一総合出版、2022
- ・須黒達己、ハエトリグモハンドブック 増補改訂版、文一総合出版、2022
- ・阪本優介、テントウムシハンドブック、文一総合出版、2018
- ・安田守、イモムシハンドブック、文一総合出版、2010
- ・安田守、イモムシハンドブック 2、文一総合出版、2012
- ・安田守、イモムシハンドブック 3、文一総合出版、2014
- ・鈴木知之、新カミキリムシハンドブック、文一総合出版、2017
- ・森本桂他、原色日本甲虫図鑑（Ⅰ）、保育社、1986
- ・上野俊一他、原色日本甲虫図鑑（Ⅱ）、保育社、1985
- ・黒澤良彦他、原色日本甲虫図鑑（Ⅲ）、保育社、1985
- ・林匡夫他、原色日本甲虫図鑑（Ⅳ）、保育社、1984
- ・八木沼健夫、原色日本クモ類図鑑、保育社、1986
- ・安永智秀他、カメムシ博士入門、全国農村教育協会、2018
- ・松下清編、日本産コガネムシ上科標準図鑑、学習研究社、2012
- ・志村隆編、日本産幼虫図鑑、学習研究社、2005
- ・築地琢郎、昆虫観察図鑑、誠文堂新光社、2011

- ・海野和男、フィールドガイド身近な昆虫識別図鑑、誠文堂新光社、2013
- ・今井初太郎、里山・雑木林の昆虫図鑑、メイツ出版、2018
- ・今井初太郎、蛾の生態標本図鑑、メイツ出版、2020
- ・鈴木欣司他、昆虫好きの生態観察図鑑Ⅰ、緑書房、2012
- ・鈴木欣司他、昆虫好きの生態観察図鑑Ⅱ、緑書房、2012
- ・井上大成他、チョウの分布拡大、北隆館、2016
- ・積木久明編、地球温暖化と南方性害虫、北隆館、2011
- ・千国安之輔、写真・日本クモ類大図鑑、偕成社、1989
- ・槐真史編、日本の昆虫 1400 ①、文一総合出版、2021
- ・槐真史編、日本の昆虫 1400 ②、文一総合出版、2021
- ・多田内・村尾編、日本産ハナバチ図鑑、文一総合出版、2014
- ・新海栄一、ネイチャーガイド 日本のクモ 増補改訂版、文一総合出版、2017
- ・国立天文台編、理科年表 2022、丸善出版、2021
- ・大田区の文化財 第7集 大田区の神社、大田区教育委員会、1971
- ・岩本・伊藤他、NEW PHOTOGRAPHIC 生物図説、秀文堂、2014

資料 撮影種一覧（2022年撮影した種のうち、種名が判明したもののみ）

	分類 (目・科)	種名 (和名)	種名 (学名)	2022年の 撮影月	備考
	【シミ目(総尾目)】				
1	シミ科	ヤマトシミ	<i>Ctenolepisma villosa</i>	6	
	【トンボ目(蜻蛉目)】				
2	トンボ科	アキアカネ	<i>Sympetrum frequens</i>	9, 10, 11	
3	トンボ科	コノシメトンボ	<i>Sympetrum bacha</i>	7	
4	トンボ科	オオシオカラトンボ	<i>Orthetrum melania</i>	7	
	【バッタ目(直翅目)】				
5	バッタ科	シオウリヨウバッタ	<i>Acrida cinerea</i>	7, 8	
6	バッタ科	イボバッタ	<i>Trilophidia japonica</i>	8, 9	
7	オンブバッタ科	オンブバッタ	<i>Atractomorpha lata</i>	8, 9	
8	コオロギ科	ツツレサセコオロギ	<i>Velarifictorus micado</i>	8, 9, 11	
9	カネタタキ科	カネタタキ	<i>Ornebius kanetataki</i>	7, 9, 10, 11	
10	カマドウマ科	マダラカマドウマ	<i>Diestrammena japonica</i>	10	
11	ツユムシ科	サトクダマキモドキ	<i>Holochlora japonica</i>	7	
	【カマキリ目】				
12	カマキリ科	ハラビロカマキリ	<i>Hierodula patellifera</i>	6, 7, 9, 10, 11, 12	
13	カマキリ科	コカマキリ	<i>Statilia maculate</i>	10	
	【ゴキブリ目】				
14	ゴキブリ科	クロゴキブリ	<i>Periplaneta fuliginosa</i>	5, 6, 7, 9, 11	外来種
	【アザミウマ目(総翅目)】				
15	アザミウマ科	ヒラズハナアザミウマ	<i>Frankliniella intonsa</i>	6	
	【カメムシ目(半翅目)】				
16	アオバハゴロモ科	アオバハゴロモ	<i>Geisha distinctissima</i>	9	
17	ヨコバイ科	ツマグロオオヨコバイ	<i>Bothrogonia ferruginea</i>	8, 9	
18	ヨコバイ科	ヒシモンヨコバイ	<i>Hishimonus sellatus</i>	6	
19	ヨコバイ科	コミズク	<i>Ledropsis discolor</i>	5	

20	ハゴロモ科	アミガサハゴロモ近似種	<i>Pochazia shantungensis</i> <i>Richanula sublimate</i>	6, 9, 10	外来種
21	テングスケバ科	テングスケバ	<i>Dictyophara patruelis</i>	8, 9	
22	セミ科	ニイニイゼミ	<i>Platypleura kaempferi</i>	7	
23	セミ科	アブラゼミ	<i>Graptopsaltria nigrofuscata</i>	7, 8	
24	セミ科	ミンミンゼミ	<i>Hyalessa maculaticollis</i>	7, 8	
25	アブラムシ科	クリオオアブラムシ	<i>Lachnus tropicalis</i>	5, 8, 9	
26	カスミカメムシ科	ハギメンガタカスミカメ	<i>Eurystylus luteus</i>	5	
27	カスミカメムシ科	ヒメセダカカスミカメ	<i>Charagochilus angusticollis</i>	8	
28	カスミカメムシ科	ズアカシダカスミカメ	<i>Manalocoris filicis</i>	10	
29	カスミカメムシ科	ケブカカスミカメ	<i>Tingitotum perlatum</i>	11	
30	カスミカメムシ科	クスベニヒラタカスミカメ	<i>Mansoniella cinnamomi</i>	10	外来種
31	ゲンバウムシ科	アワダチソウゲンバイ	<i>Corythucha marmorata</i>	7	外来種
32	サシガメ科	ヤニサシガメ	<i>Velinus nodipes</i>	9, 10	
33	サシガメ科	アカシマサシガメ	<i>Haematoloecha nigrorufa</i>	10	
34	マキバサシガメ科	ハネナガマキバサシガメ	<i>Nabis stenoferus</i>	9	
35	ヒゲナガカメムシ科	ヒゲナガカメムシ	<i>Pachygrontha antennata</i>	8, 9	
36	ヒョウタンナガカメムシ科	オオモンシロナガカメムシ	<i>Metochus abbreviatus</i>	7, 8	
37	ヒョウタンナガカメムシ科	ヨツボシヒョウタンナガカメムシ	<i>Gyndes pallicornis</i>	9, 10, 11	
38	オオホシカメムシ科	オオホシカメムシ	<i>Physopelta gutta</i>	9, 10, 11	
39	ヘリカメムシ科	キバラヘリカメムシ	<i>Plinactus bicoloripes</i>	11	
40	ヘリカメムシ科	ハリカメムシ	<i>Cletus schmidti</i>	10	
41	ヘリカメムシ科	コブチヒメヘリカメムシ	<i>Stictopleurus minutus</i>	8	
42	ヘリカメムシ科	マツヘリカメムシ	<i>Leptoglossus occidentalis</i>	11	外来種
43	ヘリカメムシ科	ホソハリカメムシ	<i>Cletus punctiger</i>	7	
44	ホソヘリカメムシ科	クモヘリカメムシ	<i>Leptocoris chinensis</i>	11	
45	ツチカメムシ科	ツチカメムシ	<i>Macroscytus japonensis</i>	6	
46	カメムシ科	チャバネアオカメムシ	<i>Plautia stali</i>	5, 6	
47	カメムシ科	クサギカメムシ	<i>Halyomorpha halys</i>	5, 6, 8, 11	
48	カメムシ科	キマダラカメムシ	<i>Erthesina fullo</i>	5, 6, 7, 8, 9	外来種

49	カメムシ科	ツヤアオカメムシ	<i>Glaucias subpunctatus</i>	8, 9	
50	ツノカメムシ科	エサキモンキツノカメムシ	<i>Sastragala esakii</i>	11	
51	ツノカメムシ科	オオツノカメムシ	<i>Acanthosoma giganteum</i>	11	
52	ツノカメムシ科	ヒメハサミツノカメムシ	<i>Acanthosoma forficula</i>	10	
53	ツノカメムシ科	セアカツノカメムシ	<i>Acanthosoma denticaudum</i>	6	
54	イトカメムシ科	イトカメムシ	<i>Yemma exilis</i>	8	
55	キジラミ科	クワキジラミ	<i>Anomoneura mori</i>	5	
	【ハチ目(膜翅目)】				
56	スズメバチ科	セグロアシナガバチ	<i>Polistes jokahamae</i>	7, 11	
57	スズメバチ科	コガタスズメバチ	<i>Vespa analis</i>	9	
58	セナガアナバチ科	サトセナガアナバチ	<i>Ampulex dissector</i>	10	
59	ミツバチ科	ニホンミツバチ	<i>Apis cerana</i>	5	
60	ミツバチ科	クマバチ	<i>Xylocopa appendiculata</i>	6, 9	
61	ツチバチ科	キンケハラナガツチバチ	<i>Megacampsomeris prismatica</i>	8, 10	
62	ハキリバチ科	スミスハキリバチ	<i>Megachile humilis</i>	9	
63	ベッコウバチ科	ツマアカクモバチ	<i>Tachypompilus analis</i>	8	
64	アリ科	クロオオアリ	<i>Camponotus japonicus</i>	9	
65	アリ科	クロヤマアリ	<i>Formica japonica</i>	5, 11	
	【アミメカゲロウ目(脈翅目)】				
66	ウスバカゲロウ科	コカスリウスバカゲロウ	<i>Distoleon contubernalis</i>	7	
67	クサカゲロウ科	ヤマトクサカゲロウ	<i>Chrysoperla nipponensis</i>	6, 10, 11, 12	
	【コウチュウ目(鞘翅目)】				
68	オサムシ科	トウキョウヒメハンミョウ	<i>Cylindera kaleea</i>	7	
69	オサムシ科	オオヒラタゴミムシ	<i>Platynus magnus</i>	5	
70	コガネムシ科	アオドウガネ	<i>Anomala albopilosa</i>	6, 9	
71	コガネムシ科	コフキコガネ	<i>Melolontha japonica</i>	7	
72	コガネムシ科	ナガチャコガネ	<i>Heptophylla picea</i>	5, 6	
73	コガネムシ科	セマダラコガネ	<i>Blitopertha orientalis</i>	5, 6	
74	コガネムシ科	カナブン	<i>Pseudotorynorrhina japonica</i>	6	

75	コガネムシ科	ビロウドコガネ	<i>Maladera japonica</i>	7, 9	
76	コガネムシ科	アカビロウドコガネ	<i>Maladera castanea</i>	7	
77	クワガタムシ科	コクワガタ	<i>Dorcus rectus</i>	8	
78	ジョウカイボン科	セボシジョウカイ	<i>Lycocerus vitellinus</i>	5	
79	タマムシ科	ムツボシタマムシ	<i>Chrysobothris succedanea</i>	5	
80	タマムシ科	シロテンナガタマムシ	<i>Agrius sospes</i>	5	
81	タマムシ科	コウゾチビタマムシ	<i>Trachys broussonetiae</i>	8, 9, 10	
82	コメツキムシ科	サビキコリ	<i>Agrypnus binodulus</i>	6, 8, 10	
83	コメツキムシ科	ヒメサビキコリ	<i>Agrypnus scrofa</i>	6	
84	ヒョウホンムシ科	タバコシバンムシ	<i>Lasioderma serricorne</i>	9	外来種
85	テントウムシ科	ナミテントウ	<i>Harmonia axyridis</i>	5, 6, 7, 9, 10	
86	テントウムシ科	ダンダラテントウ	<i>Menochilus sexmaculatus</i>	5, 6, 9, 10, 11	
87	テントウムシ科	キイロテントウ	<i>Illeis koebelei</i>	5, 6, 8	
88	テントウムシ科	コクロヒメテントウ	<i>Scymnus posticalis</i>	5, 6, 7, 10	
89	テントウムシ科	ムーアシロホシテントウ	<i>Calvia muiri</i>	5, 6, 9, 10	
90	テントウムシ科	ニジュウヤホシテントウ	<i>Henosepilachna vigintioctopunctata</i>	8	
91	テントウムシ科	オオニジュウヤホシテントウ	<i>Henosepilachna vigintioctomaculata</i>	8, 10	
92	テントウムシ科	モンクチビルテントウ	<i>Platynaspidius maculosus</i>	5, 6, 7, 8, 9	外来種
93	テントウムシ科	クモガタテントウ	<i>Psyllobora vigintimaculata</i>	9, 10, 11, 12	外来種
94	テントウムシ科	ヒメカメノコテントウ	<i>Propylea japonica</i>	9	
95	ケシキスイ科	アカマダラケシキスイ	<i>Lasiodactylus pictus</i>	6, 7, 9	
96	ゴミムシダマシ科	サトユミアシゴミムシダマシ	<i>Promethis valgipes</i>	4, 5, 6, 7, 9, 10, 11	
97	ゴミムシダマシ科	ルリゴミムシダマシ	<i>Derosphaerus subviolaceus</i>	5, 10, 11	
98	ゴミムシダマシ科	オオメキバネハムシダマシ	<i>Lagria rufipennis</i>	9	
99	ゴミムシダマシ科	ベニモンキノコゴミムシダマシ	<i>Platydema subfascial</i>	5	
100	ゴミムシダマシ科	ヒゲアトハムシダマシ	<i>Luprops orientalis</i>	5, 6, 7, 9, 10	
101	カミキリムシ科	キマダラミヤマカミキリ	<i>Aeolesthes chrysothrix</i>	4	
102	カミキリムシ科	ナガゴマフカミキリ	<i>Mesosa longipennis</i>	7	
103	ハムシ科	キボシツツハムシ	<i>Cryptocephalus perelegans</i>	6	

104	ハムシ科	ドウガネサルハムシ	<i>Scelodonta lewisii</i>	9	
105	ハムシ科	ニレハムシ	<i>Pyrrhalta maculicollis</i>	6, 9, 10	
106	ハムシ科	クロウリハムシ	<i>Aulacophora nigripennis</i>	5, 8, 9	
107	ハムシ科	イチモンジハムシ	<i>Morphosphaera japonica</i>	6	
108	ハムシ科	ヘリグロテントウノミハムシ	<i>Argopistes coccinelliformis</i>	6	
109	ハムシ科	ルリナガスネトビハムシ	<i>Psylliodes bretteghami</i>	8, 9, 10	
110	ハムシ科	ルリマルノミハムシ	<i>Nonarthra cyanea</i>	6	
111	ハムシ科	エノキハムシ	<i>Pyrrhalta tibialis</i>	9	
	【ハエ目(双翅目)】				
112	ハナアブ科	ホソヒラタアブ	<i>Episyrphus balteatus</i>	5, 6, 9, 10	
113	ミズアブ科	アメリカミズアブ	<i>Hermetia illucens</i>	9	外来種
114	チョウバエ科	オオチョウバエ	<i>Clogmia albipunctatus</i>	5, 6	外来種
115	ミバエ科	ミスジミバエ	<i>Bactrocera scutellatus</i>	8, 10	
116	クロバエ科	ミドリキンバエ	<i>Lucilia illustris</i>	5	
117	ショウジョウバエ科	キイロショウジョウバエ	<i>Drosophila melanogaster</i>	5, 6	
118	ガガンボ科	ホリカワクシヒゲガガンボ	<i>Ctenophora bifascipennis</i>	5, 8	
119	ガガンボ科	キイロホソガガンボ	<i>Nephrotoma virgata</i>	6	
120	カ科	ヒトスジシマカ	<i>Aedes albopictus</i>	8, 9, 10, 11	北上種
121	カ科	アカイエカ	<i>Culex pipiens</i>	10, 11	
122	ユスリカ科	セスジユスリカ	<i>Chironomus yoshimatsui</i>	10	
	【チョウ目(鱗翅目)】				
123	アゲハチョウ科	アゲハ	<i>Papilio Xuthus</i>	5, 6, 7, 9, 10	
124	アゲハチョウ科	アオスジアゲハ	<i>Graphium Sarpedon</i>	7, 10	
125	シジミチョウ科	ヤマトシジミ	<i>Zizeeria maha</i>	6, 7, 8, 9	
126	シジミチョウ科	ムラサキシジミ	<i>Narathura japonica</i>	7, 9	
127	シジミチョウ科	ウラギンシジミ	<i>Curetis acuta</i>	11	
128	タテハチョウ科	ツマグロヒョウモン	<i>Argyreus hyperbius</i>	8, 10	北上種
129	タテハチョウ科	アカタテハ	<i>Vanessa indica</i>	10, 11	
130	タテハチョウ科	アカボシゴマダラ	<i>Hestina assimilis</i>	6, 7, 8, 9, 10	特定外来生物

131	タテハチヨウ科	サトキマダラヒカゲ	<i>Neope goschkevitschii</i>	5	
132	タテハチヨウ科	クロコノマチヨウ	<i>Melanitis phedima</i>	9	北上種
133	タテハチヨウ科	ヒメジャノメ	<i>Mycalesis gotama</i>	9	
134	セセリチヨウ科	イチモンジセセリ	<i>Parnara guttata</i>	8, 9, 10	
135	ツトガ科	マエアカスカシノメイガ	<i>Palpita nigropunctalis</i>	5, 11, 12	
136	ツトガ科	ミツテンノメイガ	<i>Mabra charonialis</i>	6	
137	ツトガ科	キアヤヒメノメイガ	<i>Diasemia accalis</i>	9	
138	ツトガ科	アメリカピンクノメイガ	<i>Pyrausta inornatalis</i>	9	外来種
139	ツトガ科	オオキノメイガ	<i>Botyodes principalis</i>	10	
140	ツトガ科	ツゲノメイガ	<i>Glyphodes perspectalis</i>	8, 10	
141	ツトガ科	シロオビノメイガ	<i>Spoladea recurvalis</i>	10, 11	
142	メイガ科	ウスグロツヅリガ	<i>Achroia innotata</i>	5, 8, 11	
143	メイガ科	トビイロシマメイガ	<i>Hypsopygia regina</i>	6	
144	メイガ科	キベリトガリメイガ	<i>Endotricha minialis</i>	8	
145	メイガ科	フタスジシマメイガ	<i>Orthopygia glaucinalis</i>	7, 9	
146	トリバガ科	ブドウトリバ	<i>Nippoptilia vitis</i>	5, 10, 11	
147	トリバガ科	ヒルガオトリバ	<i>Emmelina argoteles</i>	8	
148	シャクガ科	ウスミドリナミシャク	<i>Episteira nigrilinearia</i>	7, 9, 10	
149	シャクガ科	ウスキクロテンヒメシャク	<i>Scopula ignobilis</i>	8, 9, 10	
150	スズメガ科	オオスカシバ	<i>Cephonodes hylas</i>	5, 7, 9	
151	スズメガ科	ピロードスズメ	<i>Rhagastis mongoliana</i>	8	
152	スズメガ科	ウンモンズズメ	<i>Callambulyx tatarinovii</i>	9	
153	スズメガ科	ホシヒメホウジャク	<i>Neogurelca himachala</i>	10, 11	
154	スズメガ科	セスジスズメ	<i>Theretra oldenlandiae</i>	8	
155	カレハガ科	マツカレハ	<i>Dendrolimus spectabilis</i>	5, 7	
156	ドクガ科	チャドクガ	<i>Arna pseudoconspersa</i>	5, 7	
157	ドクガ科	ドクガ	<i>Artaxa subflava</i>	6	
158	ヒトリガ科	キシタホソバ	<i>Eilema aegrota</i>	5, 7	
159	ヒトリガ科	シロヒトリ	<i>Chionarctia nivea</i>	9	

160	ヒトリガ科	アメリカシロヒトリ	<i>Hyphantria cunea</i>	7	外来種
161	ヒトリガ科	カノコガ	<i>Amata fortunei</i>	8	
162	ヤガ科	マダラツマキリヨトウ	<i>Callopietria repleta</i>	9	
163	ヤガ科	イチジクキンウワバ	<i>Chrysodeixis eriosoma</i>	10, 11	
164	ヤガ科	ムクゲコノハ	<i>Thyas juno</i>	11	
165	ヤガ科	キクキンウワバ	<i>Thysanoplusia intermixta</i>	11	
166	ヤガ科	ノコメガリキリガ	<i>Telorta divergens</i>	11	
167	ヤガ科	ウスチャヤガ	<i>Xestia dilatate</i>	10,11	
168	ヤガ科	ヨスジノコメキリガ	<i>Eupsilia quadrilinear</i>	11, 12	
169	ヤガ科	コキマエヤガ	<i>Albocosta triangularis</i>	11	
170	ヤガ科	ミドリハガタヨトウ	<i>Meganephria extensa</i>	11, 12	
171	ヤガ科	カブラヤガ	<i>Agrotis segetum</i>	11	
172	マルハキバガ科	シロスジベニマルハキバガ	<i>Promalactis enopisema</i>	5	
	【クモ目】				
173	ジグモ科	ジグモ	<i>Atypus karschi</i>	9, 10	
174	コガネグモ科	オニグモ	<i>Araneus ventricosus</i>	8, 10	
175	ジョロウグモ科	ジョロウグモ	<i>Nephila clavate</i>	9	
176	ハグモ科	ネコハグモ	<i>Dictyna felis</i>	10	
177	ヒメグモ科	シロホシヒゲグモ	<i>Steatoda grossa</i>	9, 10, 11, 12	
178	アシダカグモ科	アシダカグモ	<i>Heteropoda venatoria</i>	5, 6, 7, 8, 9, 10	
179	ハエトリグモ科	アリグモ	<i>Myrmarachne japonica</i>	5, 8	
180	ハエトリグモ科	ヤガタアリグモ	<i>Myrmarachne elongate</i>	9	
181	ハエトリグモ科	シラヒゲハエトリ	<i>Menemerus fulvus</i>	5, 8, 9, 10	
182	ハエトリグモ科	ネコハエトリ	<i>Carrhotus xanthogramma</i>	5, 9, 10	
183	ハエトリグモ科	アダンソンハエトリ	<i>Hasarius adansoni</i>	5, 7, 9, 10, 11	
184	ハエトリグモ科	メスジロハエトリ	<i>Phintella versicolor</i>	7, 8, 9, 10	

“馬込のフェアブル” 昆虫記 —2022年、馬込八幡神社境内で撮影した昆虫・クモ類— (p.3～43) 伊藤 洋文

ビジュアル的に興味深い昆虫たち ()内は撮影日



ムツボシタマムシ
わずか1cmほどだが、その光沢はまさにタマムシである。
(2022.5.15)



コウゾチビタマムシ
境内で卵かクワクサの葉上で輝く小さな宝石のような昆虫。
(2022.8.9)



キボシツツハムシ
色彩の多様なハムシ類の中でも特におしゃれな種の一つ。
(2022.6.5)



ドウガネサルハムシ
わずか4mm程だが、まるで金属製のメカのような重厚感。
(2022.9.25)



アメリカピンクノメイガ
名前の通り、北米原産のド派手な外来種。
(2022.9.28)



アカボシゴマダラ
境内で卵から成虫まで観察できるが、特定外来種である。
(2022.7.24)



ハゴロモ科の外来種
2022年時点でまだ和名がない。
左上: 幼虫、右下: 成虫。
(2022.9.23)



テングスケバ
何科の虫かという、テングスケバ科。セミ等に近い。
(2022.8.30)



マダラツマキリヨトウ
歌舞伎役者が演歌歌手の衣装を彷彿とさせるガの一種。
(2022.9/25)

“馬込のフェアブル” 昆虫記 —2022 年、馬込八幡神社境内で撮影した昆虫・クモ類— (p.3 ~ 43) 伊藤 洋文

テントウムシの多様性

()内は撮影日



和名はすべてナミテントウであり、学名もすべて *Harmonia axyridis* である。
ナミテントウは、同種の中でも多様性に富んでいるテントウムシで、他にも変異は多い。
(撮影日は順に、2022.5.8、5.15、5.21、5.22、6.12、6.12、9.28、10.9)



ダンダラテントウ
ナミテントウとは、ほぼ同大。
(2022.9.25)



キイロテントウ
そのまんまのネーミング。
(2022.5.14)



ムーアシロホシテントウ
とてもおしゃれな柄である。
(2022.5.30)



モンクチビルテントウ
3mm ほどしかない外来種。
(2022.7.10)



クモガタテントウ
これも 3mm ほどの外来種。
(2022.10.4)



ニジュウヤホシテントウ
畑や家庭菜園では害虫。
(2022.8.2)

“馬込のファーブル” 昆虫記 —2022年、馬込八幡神社境内で撮影した昆虫・クモ類— (p.3～43) 伊藤 洋文

カメムシの多様性

()内は撮影日



ツヤアオカメムシ
名前の通り、光沢のある鮮やかな緑色のカメムシ。
(2022.9.25)



イトカメムシ
とてもカメムシ類と思えないスリムなスタイルである。
(2022.8.15)



アカシマサシガメ
赤と黒の配色がとてもおしゃれなカメムシ。
(2022.10.11)



ヤネサシガメ
自分の体表に松脂をギトギト塗り付けている超個性派。
(2022.9.4)



クモヘリカメムシ
イトカメムシほどではないがスリムな体型のカメムシ。
(2022.11.19)



エサキモンキツノカメムシ
最も会いたかったカメムシ。キュートな模様は昆虫界一。
(2022.11.22)



キマダラカメムシ
長崎県の出島から二百年以上かけて上京した外来種。
(2022.7.10)



クスベニヒラタカスミカメ
わずか 1cm 弱の外来種。玄関の灯火に飛来した。
(2022.10.14)



マツヘリカメムシ
アメリカのロック歌手的な様相の北米出身の外来種。
(2022.11.6)